

文化に配慮することは、現代的避妊法を使用しているカップルや個人がもつ文化的抵抗を軽減し、克服するのを助ける。特に女性が妊娠・出産を調節する能力を強化する方法を用意する。文化に配慮したアプローチは、セクシュアル／リプロダクティブ・ヘルスの推進に関わる開発協力組織にとって欠かせない手段である。

例えば、ほとんどの国の政府、地域社会、国際社会は女性性器切除が人権侵害であり、心身の健康に危険を及ぼすと見なしている。しかし、この慣習はいくつかの社会では広く行われ、しかも深く根を張っている。しかし、それが一人前の成人として社会の仲間入りをするのに必要なことであると考えられたり、これを経ていない女性は醜くて非衛生的と見なされたりすることがある。この慣習を止めさせるには、コミュニティとの密接な協力と話し合いに基づき、すべての異なる文化的意味づけを考慮に入れ、意味のある代替案を探す作業が必要となる。

オピニオン・リーダーや指導者、また現場で活動する人々や組織と協力関係を結ぶことが重要である。ときとして、文化の「番人」と言われる人が女性の権利の擁護者となることもある。カンボジアでは、仏教の僧侶と僧侶が HIV／エイズとの闘いにめざましい活躍をしている。ジンバブエでは、地元のリーダーがその難題を取り上げた。この同盟関係を成功させるには、女性、若者、労働者の組織を含めた幅広い分野の組織との連携を図り、一緒に活動して相互に補強しあうことが重要である。文化に配慮したアプローチは、ミレニアム開発目標を達成する上で不可欠である、と白書は述べている。

その中の目標 5 が妊産婦死亡率を減らすことである。妊娠や出産が原因で死亡する女性の数は、1980年代以来、約 53 万 6,000 人と基本的に変化していない。その数字の何倍にもあたる 1,000 万人から 1,500 万人の女性が傷害や疾病に苦しんでいる。妊産婦死亡率の低下と、産科的フィスチュラのような傷害の予防は、妊娠と出産時のケア、合併症の際の救急治療体制、家族計画の利用が、いかに改善されるかにかかっている。文化的配慮は、これら重要な計画を成功させる上で不可欠である。

宗教は多くの人々の生活の中心にあり、最も身近な事柄に関する決定や行動を左右する点についても、白書は認識している。「名誉」の名の下の殺人や「痴情殺人」など、露骨な人権侵害である文化的慣習を正当化するのに宗教が利用されることがある。文化的配慮は、文化の内側からこのような慣習に反対する女性と男性に対する支持を引き出せる。例えば、リプロダクティブ・ヘルスのプログラムの企画、実行、普及に男性を参加させることは、そのプログラムが文化に配慮したことを示すことになる。ジェンダーとその不平等に関する男性の経験に注意を払うことで男性の抵抗感を克服する助けになる。

### 貧困、不平等、人口

白書は、開発がうまくいくかどうかは、とりわけ人口目標を達成することにかかっている、と述べている。国際人口開発会議 (ICPD, 1994) では、179 カ国の政府が 2015 年までの達成目標に合意した。その目標の多くはミレニアム開発目標 (MDGs) の中に取り込まれ、リプロダクティブ・ヘルス・ケアと教育を誰でも受けられるようにすること、女性のエンパワーメントとジェンダーの平等を達成することが含まれている。

非常に貧しい人々や社会から取り残された人々は開発政策の恩恵を受けることが最も少ない。彼らの教育と保健ケアは恵まれた層ほど良くはなく、寿命も低い。中でも貧しい女性ほど伝統と文化の有害な側面に縛られており、妊産婦死亡、疾病、傷害の危険も高い。

不平等な「開発」により、これまで以上に多くの人々を貧困に追いやり、すでに貧困だった人々の貧困度はますます深刻になる。保健と教育のレベルが低いと、所得が多少増えたとしても健康や福祉の向上に回すことがさらに難しくなる。機会と資源の利用の可能性と人権を享受する能力は、ある程度、ジェンダーの関係と身体的能力によって左右される。したがって、地域の実態と文化的背景の中で行われる人々の選択を分析することは、よりよい政策の前提条件となる、と白書は結論づけている。

⇒

『世界人口白書 2008』は、女性が貧困よりも文化的制約があって家族計画を利用するのに二の足を踏むような場合でも、プログラムが成功する可能性があることを経済開発がほとんど進んでいないハンガリーでの例を挙げて示している。一方で、貧しい女性の中には、自分のリプロダクティブ・ヘルスを守るためというより、子供を養えないために避妊を利用している人がいる。妊娠・出産をより安全にする鍵は、次のことを通してリプロダクティブ・ヘルスを高めることである。

(1) 意図しない妊娠を減らし計画的に産間隔をあげるための家族計画の利用、(2) すべての出産に対する専門家のケア、(3) 出産時の合併症に対する時宜を得た産科治療、(4) 産後の母子に対する専門家のケア。専門技能者の立ち会いの下で出産した女性は、産後の経過がそれだけよくなる見込みがある。立ち会い出産の割合が低い貧しい女性、貧しい国の場合、妊産婦の死亡率と罹病率が高くなる。

しかし、数字だけか問題なのではない。リプロダクティブ・ヘルスサービスの課題は、出産立ち会いの技能者の数を増やすことだけではなく、女性と文化的つながりのある専門技能者を立ち合わせることで、文化的に受容される救急・産科ケアの効果的支援および専門医照会を整備することである。

移住の関係者はすべて複雑な経験を経てきていることを白書では認めている。国際移住者は 2005 年に 1 億 9,100 万人前後おり、少なくとも年間 2510 億ドルを自国に送金している。彼らは経済面だけでなく文化面でも貢献している。彼らは移住先と出身地で文化的メッセージを取り上げ、それを伝えている。そこには人権やジェンダーの平等に対する態度も含まれている。受け入れ国での問題の中には、移住者に対する誤解、差別、敵愾心があり、送り出し国の側の問題には、熟練技能や資格をもつ労働者と家族やコミュニティの構成員の喪失がある。移住の間の側面である人身売買は、関連するコミュニティと個人に損害を与える。国内移動の場合は、幅広い危険と機会をもたらすが、白書によると、貧しい人々はより多くの危険にさらされ、逆に機会に恵まれることはより少ない。都市にはよりましな社会サービスがあっても、貧しい人々は経費をまかなえない。このため移住者の多くは、明らかにケアの質は劣っていても故郷に帰って出産する。

『世界人口白書 2008』は、経済的・社会的変化の影響が累積され、それに呼応して文化もまた変化を余儀なくされる、と結論づけている。しかし、適応がうまくいくかどうかは、何が起きているかを理解し、うまく対応することにかかっている。

### 紛争下におけるジェンダーとリプロダクティブ・ヘルス

女性は「文化の保護者」として見なされることもあり、戦争中に攻撃目標にされる。レイプは女性を狙った暴力行為であるばかりでなく、女性の背後にある文化全体への暴力行為でもある。こうして女性は二重の苦しみを味わう、と白書は言う。

コミュニティはレイプの被害女性を、墮落している、あるいは価値がないと見なし、その結果、被害者はさらなる暴力に苦しむこともある。文化の軍事化により、暴力が増え、それを容認する傾向が強まり、女性のエンパワーメントとジェンダーの平等に逆行する。同時に男性不在の中で世帯主になるなど、女性にはさらなる責任と犠牲が押しつけられる。家族を守る責任を果たせないで無力感を覚える男性が腹を立て暴力を引き起こすこともある。

国連安全保障理事会の決議 1325 号 (2000 年) では、女性の人権は国際的安全保障の問題でもあると認めている。この決議には見落とされている点があり懸念されるものの、それは政策に重要な欠陥があることを認め、変革を求めている。開発援助と人道的支援に携わっている人々は武力闘争によるストレスに敏感でなくてはならない、と白書は強調する。

文化に配慮したアプローチは、リプロダクティブ・ヘルスとライツを含め、ジェンダーの平等に向けて女性がこれまでに達成した進歩をどんなものでも守ることを目指している。文化に配慮したアプローチは、女性を暴力から守ることができ、男性が暴力に走るのを回避するのを助ける。

⇒